

現代英訳聖書と性差別表現

寺 澤 盾

1. はじめに

1980年代半ばから現在に至る数年の間に英米で様々な英訳聖書が刊行され、16, 17世紀の「聖書翻訳黄金時代」の再来の感がある。英国では、1985年にカトリック系聖書 Jerusalem Bible (1966) の改訂版 New Jerusalem Bible (略称 NJB) が出版された。1989年には、それまで英国における代表的現代英語訳聖書であった New English Bible (1961-70; 略称 NEB) に大幅な手直しを加えた Revised English Bible (略称 REB) が出た。米国では、Authorised Version (1611; 略称 AV) の伝統を継ぐ Revised Standard Version (1946-52; 略称 RSV) が長らく人々に親しまれてきたが、1990年(著作権は1989年)これを全面改訂した New Revised Standard Version (略称 NRSV) が公刊された。さらに新約聖書の英訳として昨年(1991)刊行の Bible for Today's Family (略称 BTF) がある。米国の代表的カトリック聖書 New American Bible (1970; 略称 NAB) の改訂作業も進められ、1986年には新約部分の改訂が終了した。こうした様々な新しい英訳聖書は、それぞれ独自性を保ちながらもいくつか共通した特徴を備えている。例えば、RSV や NEB では神に対する場合に限り2人称単数代名詞の古形 thou, thee, thy, thine を用いていたが、上述の現代英訳聖書では全て you, your に改められている。もう一つの重要な共通の特徴として挙げられるのが、近年、主にフェミニストから批判を受けている性差別表現への配慮である。例えば、NRSV の編者は序文でつとめて男性中心的言語 (masculine-oriented language) を排除する旨を強調して次のように述べている。

During the almost half a century since the publication of the RSV, many in the churches have become sensitive to the danger of linguistic sexism arising from the inherent bias of the English language towards the masculine gender,

a bias that in the case of the Bible has often restricted or obscured the meaning of the original text. The mandates from the Division specified that, in references to men and women, masculine-oriented language should be eliminated as far as this can be done without altering passages that reflect the historical situation of ancient patriarchal culture. (p. xiv)

本稿では、異なる現代英訳聖書が英語における性差別表現をどのように扱っているのか、さらに英米の聖書、カトリック系・非カトリック系聖書にこの点について何か違いが見られるのか等の問題を考えていきたい。資料として用いる現代英訳聖書は米国系の NRSV, BTF, NAB, 英国系の REB, NJB である。比較のため 1970 年代以前に出た RSV, NEB 及び米国で出版された口語自由訳聖書 Good News Bible (新約 1966, 完訳 1976; 略称 GNB) もコーパスに加える。BTF と NAB (改訂版) は新約聖書の翻訳しか刊行されていないため、新約の「マタイ伝」について各聖書を比較対照していくことにする。本論に入る前にまず英語にはどのような性差別表現がみられるのか概観したい。

男性中心的表現としてしばしば批判の対象となってきたのは、man という語を「人間」一般の意味で使う用法である。Dale Spender によれば、man は「人間」だけでなく「男性」も指しうるので、たとえこの語を前者の意味で使った場合も後者のイメージが付きまとい、その結果人間としての女性の存在が背景に追いやられてしまうという⁽¹⁾。ある著名な精神分析学者は、論文の中で “his [man’s] vital interests are... life, food, access to females” と書いているが、“his vital interests are life, food” の部分では人間一般のことに言及しているのに対して、“access to females” の部分に到ると man は「男性」の意味に移行してしまっている⁽²⁾。もしこの学者が man を純粹に「人間」の意味で用いたのならば、“his vital interests are life, food, access to the opposite sex” と書いたであろう。Rosalie Maggio は、その著書 *The Nonsexist Word Finder* において、man「人間」に代わる中立的・包括的 (inclusive) な表現として person(s), people, human(s), human being(s), one 等を挙げている⁽³⁾。同様に mankind, chairman, man-made, man in the street 等の複合語や名詞句に対しても中立的な表現が提案されている。例えば、chairman に代わる表現としては chair, chairperson がある⁽⁴⁾。但し、chairperson は、かえって「女性の議長・司会者」を連想させることが多く真の意味で包括的な表現でないという指摘もある⁽⁵⁾。尚、(特に米国の) マスコミでは男性には chairman, 女性には chairwoman を使い分ける傾向

がみられる。

Man と並んで男性中心的表現として批判の矢面に立たされているのは男性形代名詞 he の総称 (generic) 用法と呼ばれるものである。

- i) *Everyone knows he is mortal.*
- ii) *When a reporter covers a controversial story, he has a responsibility to present both sides of the issue.*

フェミニスト達は男女両性を指しうる不定代名詞 everyone や名詞 reporter を男性形代名詞でうけるのは、女性の存在を無視することに繋がると考える⁽⁶⁾。Longman Dictionary of Contemporary English (New Edition) でも、he の項目で “Some people, especially women, do not like the use of *he* with a general meaning” という記述がみられる。性差別のない新語を大幅に取り入れ注目されている Random House Webster’s College Dictionary は、巻末付録 (Avoiding Sexist Language) で総称用法の he を避ける方法として以下の 8 つを提案している⁽⁷⁾。

- a. 複数形にして文章を書き直す : *When reporters cover controversial stories, they have a responsibility . . .* (尚, everyone, anyone 等は単数扱いの they [‘singular’ they] でうける。)
- b. you, I, we を用いる : *When you are a reporter covering a controversial story, you have a responsibility . . .*
- c. one を用いる : *As a reporter covering a controversial story, one has a responsibility . . .*
- d. he or she, she or he (又は略形 he/she, she/he, s/he) を用いる : *When a reporter covers a controversial story, he or she (or she or he) has a responsibility . . .*
- e. 受身文にする : *When controversial stories are covered, both sides of the issue should be presented.*
- f. 代名詞を用いなくて済むように文章を書き換える : *When covering a controversial story, a reporter has a responsibility . . .*
- g. 代名詞を名詞に代える : *Reporters often cover controversial stories. In such cases the journalist has a responsibility . . .*
- h. 関係節を用いる : *A reporter who covers a controversial story has a responsi-*

bility

総称代名詞 he が性差別に繋がる（したがってそれを回避すべきである）という考えに対して、Robin Lakoff は、言語と性の研究の草分けといえる著書 *Language and Woman's Place* の中で、異を唱えている⁽⁸⁾。Lakoff によれば、名詞、形容詞、動詞の場合とは異なり代名詞の選択は普通、機械的・無意識的に行なわれるので、話し手（書き手）が特定の意図（女性排除）をもってそれをういたり、聞き手（読み手）がそうした意図を感じとることは実際には少ないという。Lakoff はその著書の中で頻繁に総称代名詞 he を使っている。後にみるように、man「人間」の場合と比べると he の総称用法の回避については幾つかの現代英訳聖書でも躊躇がみられる。以下、英語にみられる性差別表現が異なる現代英訳聖書でどのように扱われているのか、man「人間」と総称代名詞 he を中心にみていきたい⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。

2. Man「人間」

フェミニズム運動が本格化する以前に出版された RSV では当然予想されるように性差別表現を避けようという意図はみられない。「人間」の意で man (men も含める) は、「マタイ伝」に 122 例あらわれる。1976 年刊行の GNB では RSV で man が用いられている箇所では、people (18 例)、person (11 例)、others (5 例) 等の中立的な表現がしばしば使われている。代用語として不定代名詞 one「人」が一回も用いられていないが、これはこの表現がやや堅苦しいため口語訳の GNB では避けられたと推測できる。しかし、GNB では man が「人間」の意味で使われることも多く、RSV の man「人間」のうち Son of Man「人の子、キリスト」(30 例) の他、24 例がそのままになっている。Man から成る複合語は、RSV の「マタイ伝」には、fishermen (4:18) と herdsman (8:33) の 2 例あらわれる。Peter と Andrew を指す前者は GNB でも fishermen のままであるが、男女を特定していない後者に対して GNB では men who had been taking care of the pigs のように men が使われている。尚、man を第一要素とする複合語は RSV の「マタイ伝」にはあらわれない。

GNB と比べると NRSV では性差別表現に対する配慮がはるかに行き届いている。RSV「マタイ伝」にあらわれる man「人間」のうち、NRSV では Son of Man (30 例) の他、2 例 (7:24, 7:26) を除いて全て中立的表現に置き代わっている。Son of Man はギリシャ語からの直訳であるが (ギリシャ語はさらにアラム語からの直訳)、

これが他の表現に代えられていないのは、おそらくこの語句の原典解釈に問題があるためあえて逐語訳にとどめたと思われる。Man「人間」に代わる表現としては、others (15例) が最も多く person (10例), people (9例), someone (4例) がこれに続く。One も 2例あらわれる。(限定語句を伴った no one, everyone 等は含まない。) 複合語に関しても、RSV の herdsman (8:33) は、NRSV では man を含まない swineherds に改められている。

最新の BTF では、man「人間」を排除する傾向は NRSV よりもさらに徹底させられている。RSV の man「人間」は、BTF では Son of Man を除いて全て他の表現に代えられている。NRSV で man「人間」が保たれていた箇所 (a wise man 7:24; a foolish man 7:26) でも中立的な表現 (それぞれ a wise person, a foolish person) が使われている。BTF で用いられている主な代用表現は、people (29例), you (12例), person (8例), others (8例) である。やや口語的な people や you が多く用いられている一方で、あらたまった one は一度も使われていない。これは、BTF の口語的な性格を反映していると考えられる。RSV の herdsman (8:33) は people taking care of the pigs となっている。

カトリック系の NAB はほぼ同時代に出た NRSV や BTF に比べると、man「人間」の扱いに関してやや保守的な態度をとっている。RSV と比較すると、その man「人間」の用例のうち Son of Man の他、10例がそのままになっている。代用表現としては、person (12例), others (11例), people (7例) 等が代表的なものである。BTF とは対照的に口語的な you が用いられず、一方、ややあらたまった human being(s) (5例) や one (4例) が比較的多いのが目立つ。これは“formal rather than colloquial usage”という NAB の方針を反映していると思われる。RSV の herdsman (8:33) は NRSV と同様 swineherds になっている。

英国で出版された REB は、その序文で男性中心的表現の回避の方針を述べているが、米国系の聖書、とりわけ NRSV と BTF と比べると、man「人間」の排除は不徹底に終わっている。「マタイ伝」について REB と改訂前の NEB (2版) を比較してみると、後者にあらわれる man「人間」134例のうち REB でそのまま受け継がれているのは Son of Man (30例) の他 34例にも及ぶ。REB で NEB の man「人間」に対して中立的表現が用いられている場合、person (6例), those (6例), people (5例) 等が主なものである。8章 33節では複合語 herdsman は用いられていないが (RSV 参照)、男性中心的な表現 (men in charge of them [pigs]) になっている。尚、複合語としては同章同節に madmen があらわれる。(NEB でも同様。)

英国系のカトリック聖書 NJB では man 「人間」を避ける傾向は REB よりは強いが、それでも NEB の man 「人間」のうち Son of Man 以外に 9 例がそのままになっている。他の表現に置き換わっている場合は、anyone (24 例) が圧倒的に多く、people (11 例)、someone (9 例)、person (7 例)、human being(s) (5 例) が続く。序文で NJB の編者は、翻訳の際、宗教上の荘重さを保つため口語的表現を避けたと述べているが、NAB と同様口語的な you 「人」は用いられていない。(但し、NJB では one 「人」の用例もない。) 複合語では、herdsmen (8 : 33) が使われている。

3. 総称代名詞 he

男性形代名詞 he が総称的に用いられる場合には、

He who laughs last laughs longest.

のように he が関係代名詞を伴って「不特定の人」を表わす場合と、

Everyone knows he is mortal.

When a reporter covers a controversial story, he has a responsibility

のように he が先行する不定代名詞や名詞をうける場合がある。RSV では、he who 及び不定代名詞・名詞を受ける he の用例が多数みられる。対応する箇所を GNB でみると、he who は whoever, anyone who, those who 等に変わっている場合もあるが、そのまま he who が用いられていることもある (7 : 8, 11 : 11, 19 : 12 参照)。一方、GNB では不定代名詞・名詞をうける he の使用は避けられていない。

If anyone slaps you on the right cheek, let him slap your left cheek too. (5 : 39)

A worker should be given what he needs. (10 : 10)

このことから、he who が他の表現に変わっている場合も、それが男性中心的表現であるというよりもむしろ文語的で堅苦しい言い回しであることに起因していると考えられる。Randolph Quirk らは、he who は “a literary and somewhat archaic style” であるので、現在では those who 等の方が好まれると指摘している⁽¹¹⁾。

NRSV では、RSV にみられた he who は全て whoever, everyone who, anyone who, the one who, those who 等に置き換わっている。Everyone, anyone 等をうける総称代名詞 he も全て排除されている。he を避ける方法として NRSV では複数形を

用いて文章を書き換えている場合が最も多く、

RSV For to *every one* who has will more be given, and *he* will have abundance. (25 : 29)

NRSV For to *all those* who have, more will be given, and *they* will have an abundance.

次いで *you* や (*his* の代わりに) 冠詞を用いることが多い。

RSV *whoever* insults *his* brother shall be liable to the council . . . (5 : 22)

NRSV if *you* insult *a* brother or sister, *you* will be liable to the council.

RSV When *any one* hears the word of the kingdom and does not understand it, the evil one comes and snatches away what is sown in *his* heart. (13 : 19)

NRSV When *anyone* hears the word of the kingdom and does not understand it, the evil one comes and snatches away what is sown in *the* heart.

その他、代名詞を名詞に代えたり、

RSV *No one* can serve two masters ; for either *he* will hate the one . . . (6 : 24)

NRSV *No one* can serve two masters ; for *a slave* will either hate the one . . .

動名詞を用いたり文章を受身にする方法もみられる。

RSV Or how can *one* enter a strong man's house and plunder his goods, unless *he* first binds the strong man? Then indeed *he* may plunder his house. (12 : 29)

NRSV Or how can *one* enter a strong man's house and plunder his property, *without first tying up the strong man*? Then indeed *the house can be plundered*.

注意すべきことは、NRSV では総称代名詞 *he* を避けるために *he or she* や 'singular' *they* が一度も使われていないことである。Quirk らは、*he or she* は 'clumsy' であると言い、それを繰り返し用いなくてはならない場合は ('If *a student* does not hand in *his or her* paper today, *he or she* will not be allowed to continue the course')

とりわけそうであると述べている⁽¹²⁾。NRSVで *he or she* が採用されなかったのはこうした文体上の理由の他に、おそらくこの表現がやや冗長であり教会の礼拝等にふさわしい朗唱性 (*euphony or speakability*) に欠けるからではないだろうか。また、‘singular’ *they* については、単数不定代名詞・名詞を複数の *they* でうけるという文法上の問題 (数の不一致) が指摘されてきた。さらに、Michael Swan は、*Practical English Usage* において ‘singular’ *they* は特に会話体に多いと指摘している⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾。AV の荘重な文体を受け継ぐ NRSV でやや口語的な感じのする ‘singular’ *they* が避けられているのは不思議ではない。しかし、Quirk らによれば *they* の単数用法は近年とりわけアメリカ英語においてますます盛んになり、改まった場面・文脈でさえ容認されつつあるという⁽¹⁵⁾。NRSV では、名詞をうける総称代名詞 *he* も回避される傾向にある。「マタイ伝」10章10節では RSV が *the laborer* を *his* でうけているのに対して、NRSV では名詞を複数形にして男性中心的な言い回しを避けている。

RSV *the laborer deserves his food* (10 : 10)

NRSV *laborers deserve their food*

一方で、NRSV には *he* が男女を特定していない名詞に対して使われる例もみられ (下例の他、24 : 45-51 参照)、不定代名詞の場合と比べると総称代名詞の回避は徹底していない。

NRSV *Come to terms quickly with your accuser while you are on the way to court with him* (5 : 25)

BTF でも RSV の *he who* は全て *everyone who, anyone who, whoever, people who, all who* 等に変わっている。Everyone 等の不定代名詞をうける *he* は下の2例を除いて全て避けられている。

How can *anyone* break into a strong man's house and steal his things, unless *he* first ties up the strong man? Then *he* can take everything. (12 : 29)

If *anyone* asks why you are doing that, just say, "The Lord needs them." Right away *he* will let you have the donkeys. (21 : 3)

12章29節で *he* が用いられているのは、「強き者(男)の家に入りて、その家財を奪う人」(*anyone*) には男性のイメージの方が連想され易いためかもしれない。但し、NRSV では先にみたように受身文等を用いて *he* の使用を避けている。BTF では、

総称代名詞 *he* の代わりに *you* を用いたり、

RSV (6 : 24 既出)

BTF *You cannot be the slave of two masters! You will like one more than the other*

以下のように文章を複数形を使って書き換える場合が多い。

RSV (13 : 19 既出)

BTF *The seeds that fell along the road are the people who hear the message about the kingdom, but don't understand it. Then the evil one comes and snatches the message from their hearts.*

さらに注目すべきことは、NRSV では一例もみられなかった 'singular' *they* が BTF の「マタイ伝」には 18 例も用いられていることである (下例の他, 7 : 21, 8 : 34 <3 例>, 10 : 11 <2 例>, 12 : 36, 12 : 37 <3 例>, 13 : 41, 14 : 20, 14 : 35, 15 : 37, 22 : 16, 25 : 29 参照)。

If someone won't welcome you or listen to your message, leave their home or town. (10 : 14)

Everyone was amazed at what they saw and heard. (15 : 31)

これは Quirk らが指摘していたように 'singular' *they* がアメリカ英語では聖書や礼拝といった改まった場面でも許容されつつあることを示唆しているのかもしれない⁽¹⁶⁾。BTF では名詞をうける総称代名詞 *he* は一貫して排除されている。一例を挙げると、10 章 10 節の「労働人の、その食物を得るは相応しきなり」は、'Workers deserve their food' となっている。(他に 24 : 45-51 等参照)

NAB では総称代名詞 *he* を排除する傾向はみられない。(RSV の *he who* は, *whoever*, *(the) one who* 等に変わっているが、これは GNB の場合と同様にこの表現が文語的であることに起因していると思われる。)

REB でも男性形代名詞 *he* は頻繁に総称的に用いられており、ここでも米国系の NRSV や BTF に比べると性差別表現に対する配慮が薄い。(He who は 12 章 30 節の 2 例のみ。) 例えば、5 章 22 節では、*anyone* を *his* で、10 章 10 節の *the worker* も *his* でうけている。(NEB でも同様。)

NJB では *he* の総称用法が避けられていることもあるが、この方針は必ずしも一貫

していない。(He whoは一貫して排除されている。)「マタイ伝」5章22節で、REBは anyone を総称用法の his でうけているが、NJB では不定冠詞に変わっている。

REB *Anyone* who nurses anger against *his* brother . . . (5 : 22)

NJB *anyone* who is angry with *a* brother . . .

また、10章24節で REB では pupil や servant を his でうけているが、NJB では his が削除されている。

REB *No pupil* ranks above *his* teacher, *no servant* above *his* master. (10 : 24)

NJB *Disciple* is not superior to teacher, nor *slave* to master.

しかし、he が anyone や labourer に対して総称的に用いられているような例も少なくない。

On the contrary, if *anyone* hits you on the right cheek, offer *him* the other as well. (5 : 39)

the labourer deserves *his* keep (10 : 10)

4. その他の男性中心的表現

英語では、男性形代名詞の他に、本来男性を指す名詞が総称的に用いられることがある。RSV では、father(s) が「祖先、両親」、sons が「子孫、子供」、brother(s)/brethren が「兄弟姉妹、同胞」といった一般的な意味でしばしば使われる。GNB をみると、RSV の father(s) が ancestor(s) (3 : 9, 23 : 30, 23 : 32), sons が children (5 : 9), descendants (23 : 31), followers (12 : 27), citizens (17 : 25, 17 : 26) に変わっていることもある。しかし大部分の総称名詞 father(s), sons, brother(s) はそのまま使われている。5章9節で「子供」の意味で children が使われているが、5章45節では同じ意味で sons が用いられるといった不統一も見られる。GNB に比べると、NRSV では総称名詞を避ける傾向がはるかに顕著である。RSV の father(s) 「祖先」は全て ancestor(s) に置き換わっている (3 : 9, 23 : 30, 23 : 32)。総称的 sons や brother(s)/brethren も文脈に応じて、前者は children (5 : 9, 5 : 45, 17 : 25, 17 : 26), heirs (8 : 12), exorcists (12 : 27), descendants (23 : 31) に、後者は brother(s) or sister(s) (5 : 22, 5 : 23, 5 : 24, 5 : 47, 18 : 35), neighbor (7 : 3, 7 : 4, 7 : 5),

another member of the church (18 : 15, 18 : 21), students (23 : 8) 等に改められている。しかし、「両親」の意の fathers (10 : 21, 15 : 5) 及び「兄弟姉妹」の意の brother (10 : 21) は、RSV からそのまま継承しているような不徹底もみられる。

BTF では総称名詞は終始避けられている。Father(s)「祖先」の代りに ancestor(s) (23 : 30) が使われているのは勿論¹⁷⁾、NRSV に残っていた father「両親」も parents に改められている。総称用法の sons は children (5 : 9), followers (12 : 27), people (17 : 25, 17 : 26), relatives (23 : 31) 等に変更り、brother(s)/brethren も friend(s) (5 : 47, 7 : 3, 7 : 4, 7 : 5), brothers and sisters (10 : 21, 23 : 8), people (25 : 40), someone (5 : 22, 5 : 23, 18 : 21), follower(s) (18 : 15, 18 : 35) 等になっている。

NAB では総称的 sons は全て children (5 : 9, 5 : 45, 8 : 12, 23 : 31), people (12 : 27), subjects (17 : 25, 17 : 26) に直されているが、father(s)「祖先」が 23 章 30 節では ancestors になっているのに対して 3 章 9 節では father がそのまま使われている。また、brother(s) は総称的に用いられている。

NEB では、father(s), sons, brother(s) は総称的にしばしば用いられている。REB では、こうした総称名詞のうち NEB の sons が children に改められている一例 (5 : 9) を除いては全て継承されている。NEB の forefathers「祖先」(5 : 21, 5 : 33) も REB ではそのままになっている。同じ英国系の聖書でも NJB では、総称名詞 sons が children (5 : 9, 5 : 45, 8 : 12, 23 : 31), experts (12 : 27) に改められている。また、NEB と REB の father(s) に対して中立的な ancestors が使われている (23 : 30, 23 : 32)。但し、3 章 9 節では、NEB と REB と同様に father「祖先」が使われている。Brother(s) も総称的に使われている。

英語では、man and wife, men and girls, men and ladies といった不均衡な表現がみられるが、男女平等の立場から問題視されてきた。例えば、man and wife では、女性の側のみ既婚ということが明示されている。Men and girls は、(若い) 成人男女に対して使われるが、女性の方だけに年少を意味する語が使われており、一人前の女性を子供扱いしている印象を与えかねない。*Random House Webster's College Dictionary* (巻末付録 'Avoiding Sexist Language') では、代替表現として、husband and wife, men and women, boys and girls, ladies and gentlemen が挙げられている。

RSV をみてもみると、man/daughter (10 : 35), man/wife (19 : 5, 19 : 10) といったバランスを欠く表現がみられる。これらは、NRSV と NAB では改められていない。BTF では、man/daughter と man/wife の代りにそれぞれ sons/daughters (10 : 35), man/woman (19 : 10) が採用されている。しかし、19 章 5 節では、相変

わずら *man/wife* が用いられている。尚、GNBでも *sons/daughters* (10:35) が用いられているが、*man/wife* はそのままになっている。英国系の NEB にも、*man/daughter* (10:35), *man/wife* (5:31, 5:32, 19:3, 19:5, 19:7, 19:9) のような表現がみられる。19章10節では例外的にバランスのとれた *husband/wife* が使われている。REBは、*man/daughter*, *man/wife* を NEB からそのまま受け継いでいる。興味深いことに、NEBの *husband/wife* は、REBで *man/wife* に直されている（フェミニストの観点から言えば「改悪」されている）。NJBには、*son/daughter* (10:35), *husband/wife* (19:10) という表現がみられる一方、不均衡な *man/wife* (19:3, 19:5) もあらわれる。

5. 結 び

本稿では、英語にみられる男性中心的表現が現代英訳聖書でどのように取り扱われているのかという問題を、「マタイ伝」というコーパスに限定して考察してきた。RSVとNEBはその出版された時代からも予想されるように、性差別語を回避しようとする姿勢はみられない。1976年刊行のGNBでは、*man*「人間」が一部中立的表現に代っているが、未だかなり多くの差別表現が残されている。しかし、米国で出版されたこの聖書は、フェミニズムへの配慮をみせた最初期の英訳聖書といえるであろう。1980年代半ば以降に出版された英訳聖書では、程度の差はあるものの男性中心的表現を避けようとする意図はどの聖書にもみられる。一般に総称代名詞 *he* よりも *man*「人間」を回避する傾向が強い。これは、Lakoffが指摘しているように *he* の総称用法が必ずしも性差別とは結びつかないという見方があるからかもしれない。英米で刊行された聖書を比べると、米国系のNRSVとBTFの方が英国系のREBよりも性差別表現を避ける傾向がかなり顕著にみられる。とりわけ、BTFでは、その方針が徹底されており、*man*「人間」や総称代名詞 *he* はもとより、*father(s)*, *sons*, *brother(s)* の総称用法も排除されている。また、総称的 *he* を避ける手段の一つとして 'singular' *they* が導入されていることも注目に値する。ただし、「進歩的な」BTFでも、*man/wife* のような不均衡な表現は未だ残っている。米国で出版されてもカトリック系のNABは、NRSVやBTFと比べると、やや保守的であり、総称用法の *he* はそのまま保たれている。一方、英国系のREBでは、*man*「人間」が一部回避されているものの、カトリック聖書NJBと比べても不徹底に終わっている。REB、NJBともに *he* を総称的に用いている。

英米の聖書にみられる性差別語に対する対応の違い——一般に米国系の方がそうした表現を避ける傾向が強い——は、他の差別語の扱いにもあらわれている。「口のきけない」を意味する *dumb* は、*Random House Webster's College Dictionary* によれば、“often offensive when applied to humans” であるという。*Longman Dictionary of Contemporary English* にも同様の記述がみられる。*Dumb* は、RSV の「マタイ伝」に 6 例あらわれる (9 : 32, 9 : 33, 12 : 22 <2 例>, 15 : 30, 15 : 31)。NRSV は、これら全てを差別的ニュアンスのうすい *mute* に置き換えている。例えば、RSV の 9 章 32 節の *a dumb demoniac* は、NRSV では *a demoniac who was mute* に改められている。BTF でも、*dumb* は一貫して避けられており、9 章 32 節は、*a man who could not talk* になっている。性差別語に関して NRSV と BTF に一歩遅れをとっていた NAB も、説明的な言い方を用いたり (*a demoniac who could not speak* 9 : 32), *mute* を使ったりして *dumb* を回避している。尚、GNB でも *dumb* は差別色のない表現 (*a man who could not talk* 9 : 32) に改められている場合もあるが、*dumb* も 2 例あらわれる (15 : 30, 15 : 31)。GNB は、男性中心的表現の場合と同様こうした差別語に対して配慮した先駆的な聖書といえるかもしれない。米国系の聖書とは対照的に、英国で刊行の NEB, REB, NJB には、いずれも *dumb* が用いられている。*Dumb* は、NEB, REB, NJB の「マタイ伝」にそれぞれ 4 例、5 例、6 例あらわれる。

性差別表現の場合と同様に、*dumb* のような差別語に対しても、米国系の聖書の方がより配慮を示す傾向が見られたが、今後は差別撤廃の時代の流れの中で英国系 (及びカトリック) 聖書においてもこうした傾向は強まっていくものと考えられる。一方で、聖書の英語は、宗教典礼に相応しい荘重さ (*dignity*) と朗唱性 (*euphony*) を兼ね備えていなければならない、未だその文体上の位置付けについて議論の別れる 'singular' *they* や冗長な婉曲表現の導入には賛否両論がかわされることが予想される。いずれにしても英訳聖書においては今後も差別的ニュアンスのない、しかも宗教言語に相応しい威厳とリズムを備えた英語が模索されていくであろう。

注

1. Dale Spender, *Man Made Language*, 2nd ed. (London : Routledge and Kegan Paul, 1985), p. 157. 尚、語源的には *man* の原義は「人間」であり、後に「男性」も指すようになった (C. T. Onions, *The Oxford Dictionary of English Etymology* [Oxford : Clarendon Press, 1966], s. v. *man*)。
2. Alma Graham, "The Making of a Nonsexist Dictionary," in Barrie Thorne and

- Nancy Henley (eds.), *Language and Sex : Difference and Dominance* (Rowley, Mass. : Newbury House, 1975), p. 62.
3. Rosalie Maggio, *The Nonsexist Word Finder : A Dictionary of Gender-Free Usage* (Phoenix, Arizona : Oryx Press, 1987).
 4. *Oxford English Dictionary* (2nd ed.) によると, chairperson は 1971 年初出である。一方, chair 「議長, 司会者」の用例は既に 17 世紀半ばよりみられる。
 5. Dennis Baron, *Grammar and Gender* (New Haven : Yale University Press, 1986), p. 179 及び Deborah Cameron, *Feminism and Linguistic Theory* (London : Macmillan, 1985), p. 89 参照。
 6. Spender, p. 157 参照。
 7. *Random House Webster's College Dictionary* では, 語の意味記述の際にも総称用法の he を避けている。例えば, homemaker 「主婦, 主夫」は, “a person who manages the household of his or her own family, esp. as a principal occupation” と定義されている。
 8. Robin Lakoff, *Language and Woman's Place* (New York : Harper and Row, 1975), pp. 43-5.
 9. 女性を未婚・既婚によって区別する Mrs./Miss, 「女性=主婦」という固定観念を強化しかねない housewife 等の表現もフェミニストの批判の対象となってきた。代替表現として, それぞれ Ms. と homemaker がある。
 10. 英訳聖書における性差別表現を扱った研究としては, 第二回ブリティッシュ・カウンシル応用言語学会における筆者の口頭発表論文 (“Some Problems of English Biblical Translation” 1990 年 12 月 2 日) 及び山田俊江の論文 (「現代英・米語における性差別的表現——英訳聖書をめぐる表現変化」『東京女子大学言語文化研究』1 号 [1992], pp. 36-51) がある。山田論文では, 「申命記」と「ルカ伝」を中心に RSV, NRSV, GNB, NEB, REB を調査している。(BTF 及びカトリック聖書 NAB, NJB は扱っていない。)
 11. Randolph Quirk et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language* (London : Longman, 1985), §6.20.
 12. Quirk et al., §10.50.
 13. Michael Swan, *Practical English Usage* (Oxford : Oxford University Press, 1980), § 432.
 14. *Oxford English Dictionary* (2nd ed.) によると, they の単数用法は既に 16 世紀からみられる。
 15. Quirk et al., §10.50.
 16. Miriam W. Meyers (“Current Generic Pronoun Usage: An Empirical Study,” *American Speech* 65 [1990], p. 229) によれば, ‘singular’ they は話し言葉, 書き言葉を問わず, 米国のインテリ層 (‘highly educated Americans, including United States senators, judges, university presidents, physicians, and linguists’) によっても使われる傾向が強まっているという。
 17. RSV には, father(s) 「祖先」が他に 2 例 (3 : 9, 23 : 32) あられるが, BTF ではそれに対応する語はない。